

バレエ06-66

「チャイコフスキー記念 東京バレエ団 ベジャール=ディア ギレフ」

2006（平成18）年4月18日鑑賞く

フェスティバルホール

ペトルーシュカ

振付：モーリス・ベジャール

音楽：イーゴリ・ストラヴィンスキー

青年／古川和則

若い娘／井脇幸江

友人／大嶋正樹

魔術師／高岸直樹

三つの影／高橋竜太 平野玲 中島周

四人の男／氷室友 辰巳一政 長瀬直義 小笠原亮

四人の若い娘／小出領子 高村順子 門西雅美 長谷川智佳子

ギリシャの踊り

振付：モーリス・ベジャール

音楽：ミクス・テオドラキス

I. イントロダクション

II. パ・ド・ドゥ（2人の若者） 辰巳一政、長瀬直義

III. 娘たちの踊り

IV. 若者の踊り

V. パ・ド・ドゥ 高村順子、平野玲

VI. ハサピコ 吉岡美佳、後藤晴雄

VII. テーマとヴァリエーション

ソロ：首藤康之

パ・ド・セット：小出領子、門西雅美、長谷川智佳子、西村真由美、乾

友子、

田中結子、吉川留衣

VIII. フィナーレ 全員

ポレロ

振付：モーリス・ベジャール

音楽：モーリス・ラヴェル

上野水香

大嶋正樹

古川和則

平野玲

中島周

<クラシック音楽あれこれ>

いわゆるクラシック音楽というと、いかにも高尚で難しそうだが、決してそんなことはない。単純に、いいものは良い、そして耳に心地よく聴こえてくるものは良いということだ。

「ドイツ3大B」とは、バッハ、ベートーベン、ブラームス、ピアノの天才はショパンなど。中学時代に学ぶべき基本的な西洋音楽の系譜を学習したり、最も有名な耳になじむ曲を何回も聴いたりすることは必要不可欠だが、後は各自の好きなものを好きに聴けばいいだけのこと。そんな場合、多分誰でも好きになるのは、耳に残り、口ずさむことができるような美しいメロディのはず。ドヴォルザークの交響曲第9番『新世界より』の第2楽章『家路』はだれでも知っているが、その他にもブラームスの交響曲第1番4楽章のゆったりと美しいメロディや、西部劇に登場する美しい夕日を彷彿させるようなドヴォルザークの『チェロ協奏曲』など、私の耳に残っている名曲はたくさんある。

もちろん、モーツァルトには『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』やピアノ・ソナタ第11番イ長調 k331『トルコ行進曲付き』、そして美しいピアノ協奏曲の数々など、耳に残る名曲は数多い。別に「ええカッコ」してクラシックを聴かなくても、要するにいいものは良い、それだけのことだ。

<歌謡曲・ポップスあれこれ>

最近カラオケに行っても、おじさん組と若者組に完全に分離され、世代間の音楽交流は完全に途絶えてしまった感じが強い。そのうえ、パソコンから曲をiPodに取り入れる技術が進化したため、そんなワザを使えないおじさん頼りの演歌は、今後生きていく道が狭くなりそう・・・。私は最近、「エロカッコいい」で大人気の倅田来未が、そのセクシーさではなく、歌の実力や楽曲のすばらしさで大のお気に入り。一時は浜崎あゆみのバラード曲が大好きで、カラオケでもよく歌っていたが、最近の曲は全然ダメ。また平原綾香の歌は、難しすぎてなかなか歌えないため、チャレンジしていない。

さらに、最近観た映画『チェラッチョ!!』（06年）でのラップ曲や、その素材となった「ORANGE RANGE」の歌なども聴いていれば楽しいし、歌えないことはないと思うのだが、やはり練習しなければムリ。その点、KinKi KidsやSMAPの曲は、やはり大ヒットするようにうまくつくっているなと感心・・・。長渕剛の『男たちの大和/YAMATO』（05年）の主題歌『CLOSE YOUR EYES』も、映画の大ヒットにあわせてヒットするのかと期待したが、全然ダメ。さてその理由は・・・？

音楽大好き人間のこんな私でも、最近やはり「何じゃ、これは・・・？」と思う曲が多く、とてついてもいけないナと思うこともしばしば。やはり、これは俺も老化し、ついていけなくなったせいかも・・・？

<バレエ音楽あれこれ>

学生時代以降、クラシック音楽はLPレコードでたくさん聴いてきた私だが、バレエ音楽はチャイコフスキーの『白鳥の湖』と『くるみ割り人形』以外、ほとんどじっくりと聴いたことがない。クラシック音楽と一言で言っても、『ペトルーシュカ』を書いた19世紀末から20世紀のストラヴィンスキー（1882～1971）の時代になると、18世紀のモーツァルト、ベートーベンの時代のクラシックとは大きく異なっている。ロシアの作曲家ショスタコヴィチの交響曲第5番『革命』は、私たちが学生の頃よく聴いた曲だが、これら20世紀の音楽は技術的には大きく進歩しているのだろうが、どうも私たちにはわかりにくく、とっつきにくい感じが強い・・・。

ストラヴィンスキーは『火の鳥』や『春の祭典』で有名だし、そのLPレコードは私も数枚持っているが、聴いたのは1～2回だけ。したがって、1曲目の『ペトルーシュカ』も、その名前は知っていても、どんな音楽か知らないし、そのバレエがどんなものかも全く知らない状態。また2曲目の『ギリシャの踊り』は全く知らないもの。もっとも3曲目の『ポレロ』はよく知っている曲であるうえ、2005年7月10日に『カルメン』を観劇した時には、すばらしい踊りを観ることができたが、さて今回の『ポレロ』は？こんな風にバレエ音楽についてほとんど知らない私が、いきなりこんなバレエの公演を観て、さてどう感じるだろうか・・・？

<バレエとミュージカル>

バレエはたしかに優雅で美しく、俗世界から遠く離れた芸術のように思えるが、それはどうも『白鳥の湖』のイメージによるものらしい・・・？ところが19～20世紀のバレエは、優雅さだけではなく、特に男性が踊るバレエは武術と共通するような力強さすら感じるほど。そんな意味も含めて、私は別にバレエの芸術性を否定する訳ではないが、バレエはやはり音楽に合わせて踊るのを観ているだけだから、それだけでそのストーリー性を感じとるのは、なかなか難しいもの。1曲目の『ペトルーシュカ』にしても、解説をよく読んだうえで観れば、なるほどこういうことかとわかるものの、その学習が不十分な状態では、「きれいだナ、素敵だナ」と思うだけ。その点、音楽と歌と踊りと物語が一体となったミュージカルの方が、やはり私は好き・・・。

<かえって物語性のない方が・・・>

これに対して、2曲目の『ギリシャの踊り』は、あまり物語性にこだわらず、いくつかのパターンの踊りが次々と登場してくるものだ。そして3曲目の『ポレロ』は、円卓の上の1人の女性が主役となって、『ポレロ』の曲に合わせて踊るもの。円卓の周りの20名の男性は、バックを盛りあげるだけの役割。こうなると観客は、自然に円卓の上の女性1人に集中するから、そのすばらしさが逆によくわかるというもの・・・。そう考えると、へたな物語性にこだわるよりも、かえって物語性などない方がいいのかも・・・？

<とはいっても十分満足・・・>

このように多少ケチはつけたが、決して退屈な時間を過ごした訳ではない。ただ、大好きなミュージカルを観た時ほどの感動がなかったというだけで、その美しさや力強さに十分満足したことは事実。その点は誤解なきように・・・。

2006（平成18）年4月22日記